

## はしがき

永正十八年（一五二二）七月六日、播磨から上洛したばかりの「御容顔美麗」のわずか十一歳の少年亀王丸が、岩栖院（京都市上京区）に入った。地方育ちの少年には都の景色はきつと目新しかっただろう。この亀王丸が、本書の主役である室町幕府第十二代將軍足利義晴の少年期の姿である。実は、亀王丸の上洛は同年三月に、第十代室町幕府將軍足利義植が幕府の有力大名である細川高国との確執によって京都を<sup>しゅっほん</sup>出奔したことで、実現されたものであった。まさに混沌の時代、陰謀の渦巻く戦国時代であり、そのなかで將軍となった十一歳の少年は、衰退する幕府の將軍という重荷を背負った状態で歴史・政治の表舞台へ立たなければならなかった。

義晴は、第十三代將軍義輝と第十五代將軍義昭の父であり、十六世紀の前半、まさに戦国時代の最中、二十五年間（在職…一五二二～一五四六年）にもわたり將軍としてその生涯を送った人物である。畿内の動乱による数度の京都没落、実兄弟との將軍職をめぐる対立など波乱にとんだ生涯であったが、残念ながら一般的に見れば二人の息子義輝・義昭に比べて、義晴の名前は無名である。畿内では同時代の三好長慶などが注目されるなかで、その存在はほとんど知られていない。今年（二〇二〇年）の大河ドラマでも長慶や義輝・義昭、さらには細川晴元まで登場したのに、義晴は一切登場しなかった。それにもかかわらず、本書が刊行できるのは幕府関係者の残した史料（『大館常興日記』・『蜷川親俊日記』

など)が豊富にあったため多くの研究が蓄積され、当時の幕府・将軍の実像がよりあきらかにされてきたことにある。けっして歴史上無視すべき人物ではない。

著者は以前、同じ戎光祥出版刊行の論集『足利義晴』の編者等を担当し、「総論 足利義晴政権の研究」でおおよその義晴の概説や研究情勢について述べた。しかし、これらの研究成果や、拙編著は主に研究者を対象としたものであり、一般の読者向けの内容であるとは言い難い。そこで、本書ではこの足利義晴について、研究者のみならず、主に一般の読者や大学生などに向けてまとめてみた。以前の論集では分量の問題で総論より削除した部分やさまざまな修正、その後の新しい研究成果や義晴関連の史料を見直したうえでの新知見などを取り入れた。なお、本書を執筆するにあたって、一次史料を主に用いるが、いくら豊富に残るとはいえ、すべてが網羅されているわけではない。それを補うために、この時代の代表的軍記史料である「細川両家記」をはじめとした二次史料(「足利季世記」・「万松院殿穴太記」など)も、併せて用いていくことをはじめに断っておきたい。

特に近年、十六世紀半ばの畿内戦国史について、極めて多くの成果が発表され、さまざまな事実が判明してきている。本書と同じ中世武士選書では、義晴の先代である足利義種について、山田康弘氏が『足利義種』を、天野忠幸氏は『三好一族と織田信長』で、三好氏の動向とその後の信長との継続性について、久野雅司氏は『足利義昭と織田信長』で義昭と信長との関係や、将軍権力の実像について述べられている。畿内では、中西裕樹氏の『戦国摂津の下克上』も刊行されている。それらとともに

に本書を読むことで戦国時代の足利将軍家と、それをめぐる環境がより深く理解されるのではないかと思う。昨年には、村井祐樹氏の『六角定頼』や、将軍関係では山田康弘氏の『足利義輝・義昭』も刊行された(いずれもミネルヴァ書房刊)。今年では黒嶋敏氏の『天下人と二人の将軍』(平凡社)も刊行された。これらと併せて読むことで、戦国時代の将軍・幕府や、その周辺に関わる畿内戦国史についてより深く理解できるだろう。特に義晴の前半生にかかわる義種や、後半生にかかわる六角定頼について、前述の両書があるので、彼らの詳細については本書はあまり頁を割いていない。

本書を執筆するにあたって心がけたのは、限界はあるが、義晴の人格、意識などをできるだけ取り込むことである。義晴時代の幕府や将軍権力、その周辺などの研究が深化するなかで、実は義晴自身は無個性にあつかわれていたからである。また、義晴の評伝ではあるが、本書には幕府内での手続き、栄典授与や将軍家の経済、直臣など、将軍に直結するテーマも盛り込んでみた。戦国時代の将軍家の一端を垣間見ていただき、義晴と彼が生きた時代に少しでも興味をもってもらえれば幸いである。

二〇二〇年七月

木下昌規

# 目次

はしがき	1
凡例	8

## 第I部 足利義晴と細川高国の時代

### 第一章 父・足利義澄の時代

足利義尚陣没による後継者問題／明応の政変と義澄の將軍就任／義澄を支えた側近衆／細川政元との確執と武田元信／細川政元暗殺と義澄の没落	10
---	----

### 第二章 足利義晴の登場

義晴の誕生／父義澄の死／義植との和睦と思惑／義植の出奔と高国との不和／高国に擁立され亀王丸が上洛／叙位を契機に「義晴」を名乗る／先例と異なる元服の儀／義晴、將軍となる／参内始にみる公家衆の処遇	24
--	----

### 第三章 初期義晴政権とその崩壊

幼い義晴を支えた人々／初期の政務運営と側近衆／限定的な高国の影響力／

47

### 第四章 宿命のライバル・足利義維

將軍家伝家の重宝「御小袖」の帰還／新御所の造営と高国の出家／  
歴博甲本洛中洛外図屏風／香川元盛の暗殺と義晴の対応／在京大名と若狭武田氏／  
桂川合戦と將軍の敵の「格」／初めての京都没落

足利義維の登場／義晴の兄か弟か／義維は義植の後継者か／  
避難場所として定着した坂本／「御牢人」義晴／軍事動員のため盛んに発給された御内書／  
いったんの帰洛と將軍直屬軍／難航する和睦交渉／交渉決裂と六郎方の「崇敬」／  
堺政権の構造

70

### 第五章 朽木で行われた政治

朽木への移座と直臣／京都に將軍がいること／「享祿」改元と公武関係／  
道永（常桓）の動き／第二次和睦交渉と協調体制／官位昇進と公家様花押／  
越後長尾氏と京都雜掌／交渉決裂と義維の存在感／義晴、朽木を離れる

96

### 第六章 高国の死と堺政権の崩壊

大物崩れ／常桓の死、高まる定頼への期待／堺政権の崩壊／  
幻の將軍／堺政権は「幕府」だったのか／細川六郎との和睦へ／  
「桑実寺縁起絵巻」の制作／常桓の弟・細川晴国

121

## 第Ⅱ部 帰洛後の政権運営と幕府政治

第一章 義晴、帰洛す……………144

近衛家との婚姻／天文三年の帰洛と政務の停止／飯御所南禅寺と六郎の上洛／  
後奈良天皇の即位式／嫡男義輝の誕生／京都をゆるがす天文法華の乱

第二章 特徴的な政権運営……………159

隠居宣言と内談衆の成立／内談衆のメンバー／内談衆成立の前提／内談衆の役割／  
内談衆以外の側近たち／各地の大名を取り次ぐ大名別申次／  
昵近公家衆と「足利―近衛体制」

第三章 将軍家と大名勢力……………180

六角定頼の「意見」／在国する定頼と六角氏の立場／変化する京兆家の存在／  
音信する大名勢力／西国大名への上洛要請／頻繁に行われた栄典授与

第四章 将軍家の家政と直臣たち……………205

義晴時代の幕府直轄領／御料所からの公用進納／御料所以外の収入と不足分の借用／  
治安維持のための洛中検断／義晴時代の将軍直臣／経済難に苦しむ直臣たち／  
義晴による直臣保護／義晴の血縁と子女／細川藤孝落胤説

第五章 新たな動乱の兆し……………228

今出川御所の造営／三好長慶の反乱と義晴の調停／京都に残る意味／  
天文九年の国役賦課と公武関係／天文九年の楊弓会事件と覚鑿大師号／  
木沢長政の反乱への対応／京都を離れ、再び坂本へ／「御敵」認定をめぐる／  
木沢長政の敗北／細川氏綱の登場／氏綱との連携を探る義晴／北白川城の改修

第六章 義晴の没落と死……………259

将軍職の移譲と加冠役／義輝の元服と将軍宣下／異例な義晴の右大将任官／  
内談衆の終焉／晴元勢の反撃、定頼の裏切り／晴元との関係修復へ／三好長慶の離反／  
討ち死にも覚悟した義晴の決意／中尾城の築城／大御所義晴の死と自害説／  
義晴の肖像と木像／葬儀と贈位贈官／義晴死後の将軍家

## 第一章 父・足利義澄の時代

## 足利義尚陣没による後継者問題

義晴を述べる前提として、まずは父義澄についていかなければならないだろう。義澄は、第八代將軍足利義政の庶兄で、混乱する関東に鎌倉公方として派遣されるも、最後は伊豆二国の領主として生涯を閉じることとなる足利政知（堀越公方）の子として、文明十二年（一四八〇）十二月十五日に伊豆で誕生した。幼名は不明。母は武者小路隆光の娘という。異母兄には茶々丸、同母弟には潤童子がいる。

義澄が誕生した時代は、いわゆる戦国時代の幕開けとされる応仁・文明の大乱（一四六七～一四七七）が終結した後であった。この乱によって、守護・大名家が分裂し、さらに終結後は彼らがそれまでの在京から在国に移行していったことで、これまでの將軍と在京する大名・守護らが共同して幕府政治を行う体制が解体しはじめた時期である。

乱以前までは管領（斯波・畠山・細川氏の管領家〔三職〕）が將軍親政の流れと対応しながら、將軍の補佐や御前沙汰などの政務を総括して將軍権力を支えたほか、在京する大名が侍所所司（赤松・一色・京極・山名氏の四職家）として幕府の機構を補完することで運営されてきた。將軍親裁化を進

めようとした義政は大名らと対立し、結果的に乱にいきつくが、第四代義持期の評定会議や第六代義教期の大名意見制にみられるように、本来幕府の意志決定には將軍の意向のみならず、彼ら大名の意見にも重きが置かれ、將軍と大名の一致による決定が行われていた。さらに乱後も有事の際には（土二揆など）、在京する守護・大名を中心に幕府軍が構成されていたように、在京する守護・大名は幕府の軍事力を担う存在であり続けた。

しかし、義澄が將軍となる十五世紀末には、この体制はすでに過去のものとなりつつあった。管領は幕府儀式の際に一時的に補任されるのみで、侍所所司の補任はすでに廃絶していた。だが、將軍と大名との関係が消滅したわけではないし、在京する大名もまだ残っていたのである。

さて、そのような時代に義澄は、文明十七年六月になって東山殿義政の命により、天龍寺香嚴院に入寺することになった。これに先立つ同十五年に、義政の子で香嚴院院主等賢同山が寂していたためである。香嚴院は、義澄の父政知も還俗前まで院主をつとめていた將軍家ゆかりの寺院である。その後、義澄は文明十九年（七月）に長享に改元）五月二十八日に伊豆より御供衆三百人を連れ上洛し、翌月二十五日に香嚴院にて剪髪した。剪髪役は瑞智惟明であった（『蔭涼軒日録』同日条）。法諱は清晃。当時、清晃はわずか七歳であった。

そのようななか、一つの転機が訪れる。長享三年（一四八九）三月二十六日に、従兄弟である第九代將軍足利義尚（当時は義熙）が近江の六角氏討伐の最中、鈎の陣（滋賀県栗東市）にて陣没してし

## 第一章 義晴、帰洛す

近衛家との婚姻

桑実寺に滞在するなかでも、京都より公家衆の往来があつたように（『言継』天文二年（一五三三）正月二十六日条ほか）、京都との関係は継続していた。帰洛が間近になるなかで、義晴にとって重要な出来事があつた。天文三年六月八日の近衛家との婚姻である。当時、義晴は二十四歳であつた。第三代將軍義満以来、歴代の將軍の御台所は日野家より迎えていたが、義晴は日野家ではなく、はるかに家格の高い摂関家（五摂家）の近衛家より御台所を迎えたのである。日野家は蔵人・弁官などを歴任し、大納言まで昇進できる名家の家格であり（例外として日野勝光は左大臣まで昇進）、この婚姻は、將軍家と朝廷との関係における転換点にもなつた。

義晴の御台所となつたのは、前関白太政大臣近衛尚通娘で（後の慶寿院）、彼女は永正十一年（一五一四）生まれで、当時二十一歳であつた。兄弟には前関白近衛植家、久我家の養子となつた久我晴通、大覚寺門跡義俊、聖護院門跡道増、興福寺一乗院門跡覚誓、慈照寺明岳瑞照、北条氏綱後室などがある。その輿入れは、尚通娘が近江の義晴のもとに嫁いだことが記されている（『お湯殿』天文三年六月八日条）。御台所となる尚通娘が、義晴の帰洛後ではなく、わざわざ近江の桑実寺

滞在中の義晴のもとに嫁いだことは興味深い。日時の吉凶が影響したのであるうか。なお、彼女の容姿については、後年の永禄年間ではあるが、ルイス・フロイスの『日本史』のなかに「身体つきが大きい婦人で、年老い、はなはだ威厳があつた」との記述がある。この「身体つき」が身長のことか体型のことかは判断しかねる。なお、実名は不明であるが、彼女の発給文書に「い」との署名があるため、名の一字のみは判明する（慶寿院消息『上杉』一一一四号ほか）。

ところで、代々日野家から御台所を迎えていた將軍家が、今回なぜ近衛家から御台所を迎えることとなつたのであろうか。日野家の事情をみれば、当時の当主晴光には姉妹も娘もいなかったため、義晴の正室候補がいなかったことがあげられる。もちろん、養女をとってそれを義晴の正室とする選択肢もあつただろうが、そのようなことはなかった。

近衛家からの輿入れについては、細川高国の時代にすでに縁戚の徳大寺家と相談のうえ、縁談の話が進んでいたとの指摘がある（木村二〇一一）。尚通の正室は徳大寺実淳の娘（大政所・徳大寺維子）であり、徳大寺家を介して高国と近衛家は通じていたのである。尚通娘自身の生母は尚通の正室でなく側室であつたが、尚通娘は正室維子が母として養育していたという（湯川二〇〇五）。さらに、日野家と徳大寺家も所縁があつた。日野家は明応四年（一四九五）に当主政資が死去したのち、徳大寺実淳の子内光が養子として入って継承したが、彼は桂川合戦の際に戦死した。当時の当主はその子晴光であり、実淳の孫にあたる。つまり、当時は近衛家、日野家ともに徳大寺実淳の血縁であつた